

著：大原國章

大原アトラス 1 ダーモスコピー

書評者：栗原誠一(湘南皮膚科)

不思議なアトラスである。筆者が撮りためた精細な写真集かと思いきや、読み進めるうちにいつの間にかダーモスコピー(以下、ダーモ)が自分の診療ツールになり、覗くことが楽しめるようになってくる読み物だったのだ。わたしのような素人には、ダーモとはこういうものだと迫ってこないところが好ましく、もっと早くこの本と出会っていたら、ダーモと上手につきあえたのではないかなと思った。

大学関連施設の勉強会でのこと、近くの病院に頼んだ例が提示された。腹部に角化の強い赤みがあった局面があり、視診でBowen病と診断をつけて手術を頼んだ。ところがその病理組織は表在型基底細胞上皮腫であった。当然ダーモの所見も供覧されたが、組織標本ができてから見直して、この片隅に見える血管が樹枝状血管ということなのでしょうね～という意見で締めくくられた。ダーモとはこういうものだとなんて納得した。ダーモがどのくらい役に立っているか調べたことはないが、わたしの外来では悪性腫瘍を心配して受診した患者さんに「この装置で見れば良性悪性の判断が一発でできる」と安心してもらうために使うことがほとんどである。同世代の友人達も同じようなものらしく、臨床でわからないときはダーモでもわからない、結局は病理組

織を見るほかにないという話になる。そう考えると、ありがたいツールであるには間違いない。病院に頼むべきか否かを悩まずに選別できるメリットは計り知れない。

少し読んだところで、わたしがダーモについて勘違いをしていたことに気づかせてくれた。所見をとる目的はあくまでも自分の診断精度を高めるためであって、専門用語で表現することは必須ではなく、見えたものが病理組織学的に何を意味するかわかれば十分だったのだ。聞き慣れない、それも英語の用語が並ぶだけで敬遠しがちだったダーモの所見取りが、急に肩の力が抜けて身近に感じられるようになった。

本書の構成は、ほぼすべての例が臨床—ダーモ—病理組織のセットで示されており、絵本としても見応えがある。それ以上に、序論から始まる文章には著者の考えやポリシーが込められて、読者にとって過不足のない優しい本になっている。序論では診療におけるダーモの位置づけについて「臨床、ダーモスコピー、病理は不可分に三位一体である」、「臨床診断の手順としては、まず臨床視診である程度まで診断を絞り込み、さらにダーモスコピーで補完、検証、あるいは考え直し、病理で最終決着」、「ダーモスコピーで皮疹を観察する際も臨床像との関連性病理所見との対応を意識する」

と、ダーモだけで診断しようとしてはいけないと、くちを酸っぱくして述べている。

また、進め方が堅苦しくなくて良い。第1章では観察される色がなぜその色に見えるのかを臨床ならびに病理と対比させて、なじみ深い用語で解説してくれる。第2章は黒系の総論で、dotsやstreaks, networkなどの専門用語が出てくるが説明が簡潔なうえに、regularとかatypicalについては何を判断基準にするのが問題だと正直に疑問を呈してくれている。第3章から各論になり母斑細胞母斑や悪性黒色腫、爪、基底細胞上皮腫、と続いてゆく。1歳児に生じた爪甲色素線条が1年後には濃くなり幅が広がった。読者諸氏ならどうするだろう。各項目のはじめには「要点」がまとめられ、最後には「ポイント」欄があり、著者の経験を踏まえた解説が加えられている。まさに手取り足取り、ダーモが好きになるように組み立てられている。

表題はアトラスだが、一冊の読み物を通して、実地臨床に基づいた大原國章氏の誠実さが貫かれている。シリーズの第1巻とのこと、続く作品が楽しみである。

● B5 頁392 2014年
定価：本体14,000円＋税
[ISBN978-4-7809-0897-8]
学研メディカル秀潤社刊